11 青空のような平和がいつまでも続くように願う

櫻木　順子（りぷりんと・かわさき　76歳）

『タケノコごはん』いかがでしたか。これから、おばあさんの子ども時代のお話をします。

1941（昭和16）年4月、私は、旧北多摩郡調布町小嶋分にて誕生しました。昭和20年8月15日まで続く、長い、長い不幸な時代は、この年の12月8日に日本がアメリカに宣戦布告をして始まりました。

70年前、生家の周辺は畑が広がり、朝晩に家の雨戸を開閉するために縁側に立つと、遠く富士山が見えるような場所でした。現在は新宿まで電車で15分というアクセスの良さもあり、周辺の中心都市としてマンション群がひしめき合い、大型商業施設が建ち並ぶ駅前は多くの人で賑わっています。

私の実家は、「角屋」という雑貨店を営んでいました。父は銀行員だったので、店は祖父母が切り盛りしていました。二人は長火鉢の前に座りながら、日がな一日店番をしていましたが、私はいつもそのそばにいた記憶があります。また、栗林や畑の耕作もしていました。秋に栗を出荷する際には、両親、祖父母、おじ・おばと、一家総出で収穫しました。畑では、麦、とうもろこし、トマト、キュウリ、大根、ニラ等を栽培しており、麦の刈取り時期は麦秋と呼ぶにふさわしい美しさでした。そのような家に育ったものですから、食べ物に関して「ひもじさ」はありませんでした。

しかし、昭和20年3月から5月にかけてアメリカ軍による東京都心への空爆が行われると、目黒や芝から親戚が疎開してきて、一時は20人近くの食事を支度することとなり、母は苦労したそうです。畑があったことは良かったと思いますが、早朝にドロボウが入り、作物が全て無くなっていたということもありました。生きていくことは、本当に大変なことです。

昭和20年2月には、当時三鷹にあった中島飛行機（軍需企業）の施設を標的とした空爆があり、南部に隣接する調布も戦火に見舞われました。栗林の防空壕の入口で一人布団に座り、真っ赤な夜空を見ていた自分…記憶に残っています。この時の火の広がりは旧甲州街道により防がれ、実家は焼失をまぬがれました。当時、父はすでに昭和19年に出征していたので、女手で栗林まで家財を運ぶのは大変だったと、後から母に聞かされました。

一方、出征した父は戦地に行かず、横須賀の海軍基地で事務職をしていました。私が急病をしたと電報を打つと、チョコレートやキャンディなどをポケットに入れて帰ってきてくれたことが嬉しかったです。貴重なお菓子も、ある所にはあったのです。

そして、昭和20年8月6日に広島、9日に長崎に原爆が投下され、15日に終戦を迎えました。この日のことは記憶にありませんが、実家の店に近所の人達が集まって玉音放送を聞いたそうです。翌9月には父が無事復員しました。店は戦後の配給制度や食料切符制度等の影響、祖父母の病により、昭和25年に閉じました。

その後、朝鮮戦争を機に、日本の景気は良くなっていきました。時を経て、昭和61年3月に、私は川崎市幼稚園協会の主催で韓国を訪れ、南北分断の象徴である板門店を訪れました。建物の中心が北緯38度線になっており、そこを境に韓国と北朝鮮の兵隊が銃を構えて向かい合っていました。最近は北朝鮮による核実験や弾道ミサイルの発射により、また朝鮮半島の情勢が緊迫してきています。そのほかにも、中東情勢の緊迫化や欧州の難民問題など、世界には問題が山積しています。

以前に『タケノコごはん』を読み終わった後、一人の児童が「戦争はいやだなーお父さんが死んじゃう」と言っていたのが印象に残っています。戦争に関する絵本は多く出版されています。これからも読み伝えていきたいと思います。

終戦の日は晴天だったそうです。青空のような平和がいつまでも続くように願って、私の話を終わります。

『タケノコごはん』

大島渚／文　伊藤秀男／絵
ポプラ社

故大島渚映画監督と、抜群のリアリティーを放つ絵本作家、伊藤秀男のコラボレーションでつづる「戦争」と「平和」のメッセージ。（出版社HPより）

- 発　　行：2015年8月
- ページ数：42ページ
- ＩＳＢＮ：978-4-591-14577-7